A－18　一酸化炭素中毒に対する高圧酸素療法
――とくに間歇型および遷延例に対する効果

(東大上田内科)　上田英雄　片山宗一　村山正博
藤井諒一　飯沼宏之　野村茂重郎

一酸化炭素中毒急性期における高圧酸素療法が理論上また臨床上極めて有効であることは明らかであるが、我々は遷延例および間歇型の各1例において中毒後約2ヵ月目に高圧酸素療法を施行したのでその治療成績を報告する。もとより中毒後2.3ヶ月の時期にはまだ自然寛解がみられ、本療法の効果を判定するのは困難であるがこの2例において本療法を契機として臨床症状とくに神経症状の速かな寛解を認め、また脳波所見、精神症状にも著しい改善を認めたので有効と判定した。

症例1．遷延例．29才　男子

家族歴　既往歴：特記すべきものなし

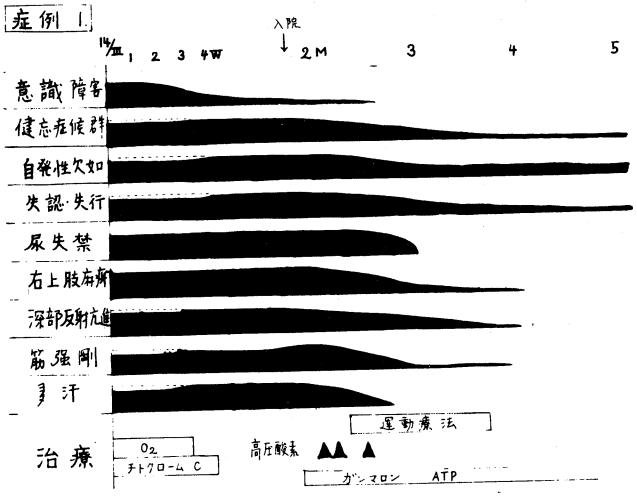
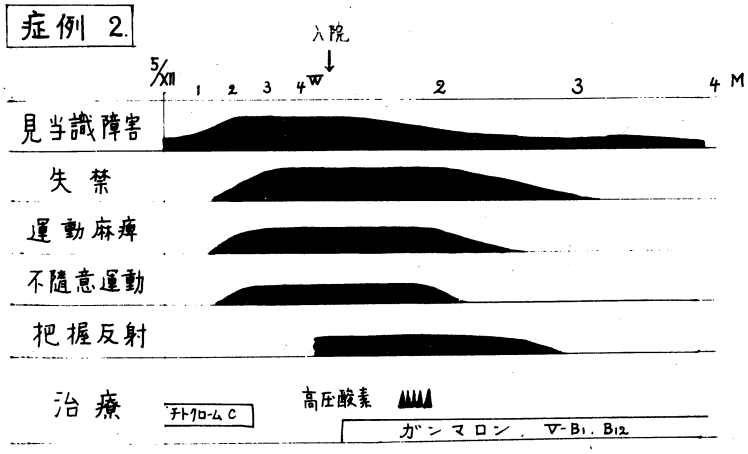
現病歴：昭和42年3月14日ガス臭強いアパートの一室で硬直状態にて発見された。全身鮮紅色．殆んど無呼吸の状態で救急病院に入院．以後2週間意識障害がつづきチトクロームCその他の治療を受け．3週目頃より短い言葉で応ずるようになった．5月6日当科に入院．意志の疎通は困難で childish な点が目立ち．見当識障害あり夜間に大声を発し暴れ．尿失禁．右不全片麻痺．足間代．深部反射亢進．発汗過多．褥瘡が認められた。一般検査成績では白血球増多 13,800．GPT．72の他著変なく．動脈血中の一酸化炭素は0．脳波では5～6 c/s，40～50 μV の θ 波が広汎に出現．α波は少く連続性不良．さらに3 c/s，50～100 μV の δ の混在を認めた．5月17日より3回にわたり高圧酸素療法を(最高1.0～2.0 kg/cm², 約1時間半)始めた所．精神症状は次第に改善をみせ．6月始めには Restlessness は著明に改善．記憶も少しずつ恢復．四肢の粗大力増強．足間代も減弱．尿失禁消失．6月8日には歩行器使用により歩行可能となった。6月中旬には Korsakoff 症候群も消失．7月に入り知能指数は50と低値を示したが．健忘症候群もごく軽度となり．よく笑うなど情動抑制の低下．自発性の欠如が軽度に認められるのみとなり．神経症状は殆んど消失するに至った。

本例は中毒後．昏睡が約2週間つづき．重篤な後遺症状を呈した一酸化炭素中毒遷延型であるが．中毒後2ヶ月目に高圧酸素療法を行ない直後より神経症状が速かに消失し．1ヵ月以内に精神症状にも著しい改善がみられた。

症例2．間歇型．65才　女子

家族歴　既往歴：特記すべきことなし．

現病歴：昭和39年11月29日．別荘にひとりで保養に出かけたが．12月5日近所の人がガスもれに気付き．患者が倒れているのを発見．発見当時．顔面紅潮し．見当識の障害を認めた他に異常なく比較的正しく応答し得た。酸素吸入．チトクロームCの注射を受けたが．12月中旬頃より尿失禁．歩行不能となり．記憶障害．見当識障害高度となり周囲に対し全く無関心で．発汗．発熱．下顎のミオクローヌス様痙攣．四肢の強直が出現した。1月8日当科に入院．上記のごとく Akinetic mutism の

状態で、筋緊張の亢進、右不全片麻痺、病的反射、把握反射がみとめられ、左下肢、下顎に不随意運動などを認め広汎にわたる器質的脳障害が考えられた。一般検査所見では特に異常なく、入院時の脳波では低～中等振巾の5～9%の徐波が認められた。ビタミン、ガンマロン、プレドニゾロンを投与したが、効果は認め難く、1月26日より高圧酸素療法（加圧は最高2 kg/cm², 2時間）を5日間にわたり実施した所終了直後より不随意運動消失、起立可能となり2月11日より歩行器で歩行練習を始められるようになった。また表情も変化にとみ、見当識障害も徐々に減弱、応答も正確になってきた。また、尿失禁も3月上旬には消失をみるに至った。

本例は一酸化炭素中毒後約10日間の無症状の時期を経て、失外套症候群の出現したものでいわゆる間歇型に属する。本例では中毒後かなり時を経て(53日目)、高圧酸素療法を施行したが、これを契機として運動麻痺、運動過多、失禁などの神経症状が消失し、また見当識障害も軽減し、かなり正確に応答しうるようになり自然寛解のみでなく、本療法の効果もかなり与っているものと考えられる。